

第7章 技師長

フェンクス氏の提案で、ワシントン・A・ローブリング大佐を技師長に選定すること、執行委員会が技師長の報酬を決定する権限を有すること、執行委員会の承認を前提として、技師長が適切と考えるアシスタント技術者を雇う権限を有することが、決議された。

1869年8月3日のニューヨーク橋梁会社の
取締役会の議事録より

ワシントン・A・ローブリング (図-7.1¹) は、南北戦争中にも、このような時期があったことを心得ていた。何も起こりそうにない時でも毎日が過ぎて行くこと、たくさんの計画を立案し次々と決断して行かねばならない時でも、配慮すべき不測の事態や、無数の気を配るべき些細な項目、与えられた命令など、そのうちのどれかが、その後の結果の全体的方向性を左右する可能性があることを、心得ていた。彼は、「手元で、『はい』とか『いいえ』という人達が必要であり、彼らがどちらの返事をするかで、たいいてい大きな違いが出る」と好んで説明していた。

その年の初め、ブルックリン側の主塔の土地が、最終的に橋梁会社の法律上の資産となる時まで、市民が待ち望んでいた工事には着手することができなかった。しかし、舞台裏では、数えきれない事項を処理する必要があった。ワシントン・ローブリングは、8月初旬の技師長への指名から、1870年3月、最初の巨大ケーソンの製作着手まで、極めて忙しい日々を送っていた。



図-7.1 ワシントン・ローブリング
(撮影 1870)

仕様書を仕上げる必要があり、杭や木材・セメント・コールタール・発破用火薬などの基本的な材料について承諾する必要があった。ありとあらゆる特別な設備や機械を注文する必要があった。それは、エアコンプレッサー・巻上げ用エンジン・石積櫓・クラムシェル用バケット・削岩機・ケーソン用エアロックであり、そのほとんどを最初から設計して特注する必要があった。いろいろな製造業者の生産能力や技量については、普通は直接に視察して判断する必要があった。労働者を集める時には、就職希望者の面接を行う必要があった。

ローブリングには、この種の計画や工事について、軍隊や父と一緒に行った多くの経験があり、大きな建設事業を仕切る仕事は、ウィリアム・キングズレーの専門であった。キングズレーは、10月14日の執行委員会の会議で、総括責任者に指名された。また、執行委員会と一緒に、キングズレーは契約先を決定することになっていた。ヘンリー・マーフィーから、ローブリングは契約に関して何もしなくて良いと説明されていた。キングズレーが本部長の職責に対して、どれほ

¹ <http://www.uh.edu/engines/epi87.htm> (参照 2016-04-28)
Rutgers University, Department of Special Collections and Archives

どの報酬を受け取っていたかは、ちょっとした謎であった。

ローブリング直属の部下は、8月末時点で6名であった。ペイン大佐、キングズレーが選んだC・C・マーティンとサム・プロバスコ、そして、ローブリングが父の死後すぐに雇った3人の青年であった。彼らは、フランシス・コリングウッド・ジュニアとジョージ・マクナルティ、ウィルヘルム・ヒルデンブラントの3人であった。

コリングウッド (図-7.2²) は、トロイ (レンセラー工科大学) でのローブリングの友人であった。彼は、ローブリングより2年前に学年で1番の成績で卒業したが、それ以来、ニューヨーク州エルマイラで親族の宝石商を手伝っており、技術的な経験はあまりなかった。ジョン・A・ローブリングであれば、おそらく、コリングウッドは雇わなかったであろう。だが新しい技師長は、彼の人間性を理解しており、熟慮のうえ、ブルックリンでローブリングの仕事を手伝ってくれるように、エルマイラのコリングウッド宛に手紙を書いていた。コリングウッドは、1ヵ月間だけ手伝うという条件で同意した (おそらく宝石商の仕事が繁盛していたと思われる)。8月中旬にブルックリンに彼が到着し、ローブリングは、ブルックリン側ケーソンの計画を担当するペインを補佐する仕事に、彼を就けた。

マクナルティは、彼ら中で最年少のわずか20歳であり、ニューヨーク出身でバージニア大学を卒業していた。彼には少しの測量経験があったが、それは経験を合計しても、ほんの僅かであり、最初にその仕事を志望した時には断られた。そこで彼は無報酬で働くとし、ローブリングがその態度に感心して、マーティンの補佐として賃金を払って雇用した。

3人の新人のなかで、ヒルデンブラント (図-7.3³) だけがしっかりした技術を身につけていた。がっしりした体格で髭を生やしていない若いドイツ人は、わずか数年前にアメリカ合衆国にやってきたばかりであり、別格の才能のある製図工であった。以前から、彼はジョン・A・ローブリングの依頼で、数多くの橋梁の完成図を作成していた。その中には、主塔の上側で雲が流れるような大きなパノラマの描写も含まれていた。それは、技術者が、完成した橋梁の見え方を説明するための、三次元的な概観図のひとつであった。最近では、新しいグラント・セントラル駅を建設中のバンダービルトの会社の建築技師たちのもとで働き、

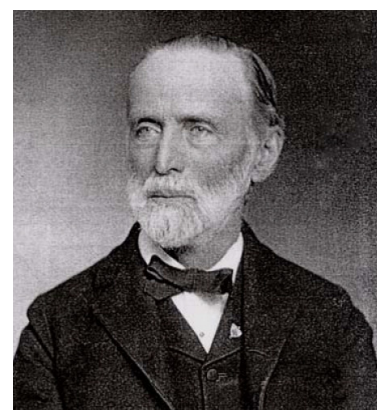


図-7.2 コリングウッド
(1834-1911)1895 撮影



図-7.3 チャールズ・ローブリング (左) と
並んだヒルデンブラント (右)

² Rensselaer Polytechnic Institute, Troy, N.Y., The Institute Archives and Special Collections, Photograph Collection

³ https://blogs.princeton.edu/graphicarts/2008/09/designing_the_brooklyn_bridge.html (参照日 2015-01-23)

列車操車場を覆う巨大なアーチ形の屋根（図-7.4⁴）を設計したのは、わずか22歳の彼であった。ヒルデブラントは、自分の時間のほとんどを事務所で費やし、橋梁のいろいろな部分の応力を計算して図面を完成させていった。だが、花崗岩の切出しを監督するために、メイン州にも出かけたこともあった。主な仕事は、工事に先立って、計画を順調に進めることであった。彼は、とても役に立つ男となっていく。



図-7.4 グランド・セントラル駅の上屋アーチ

チャールズ・シビル・マーティン（1831～1903年）は、C・C・マーティンとして知られており、ローブリングに次ぐ実力者であり、俸給は年5千ドルであった。マーティンは、ローブリングより6歳年上で、大柄で飾りがなく男らしい顔立ちで、耳以外は均整がとれていた。その耳だけは極端に大きく、髭は切り整えられており、その立ち居振る舞いはグラント將軍仕込みで、父亡き後のローブリングと同様に評判が良かった。マーティンもレンセラー工科大学の卒業生であった。ローブリングより前のクラスであったが、彼が、最初にトロイの学校に入学したとき既に23歳であり、その時でさえ古顔と見なされていた。1869年当時、結婚して10年経ち、4人の子供の父親で、ウィリアム・キングズレーの会社で3ヶ所の異なる貯水池の建設に携わった経験があった。彼は、ブルックリンで新しい水道本管を敷設し、プロスペクト公園建設を担当する主任技術者の経験もあった（公園の実際の設計は、有名な造園家フレディック・ロウ・オルムステッドとカルバート・ボーによって実施された。彼らは、セントラル・パークの設計も手懸けており、2つの公園の中で、セントラル・パークのほうが小さな仕事と考えていた）。マーティンは、息子の1人にキングズレー・マーティンという名前をつけていた。したがって、キングズレーとの対応やブルックリン政界の知識が何かと必要な場合には、マーティンは適任であった。

マーティンは、キングズレーの関心の的であった備品調達と、作業員の雇用に専念していた。彼は、実質的な橋梁の執行役員となっていく。プロバスコと若いマクナルティは、その補佐であった。

ローブリングを含む技術職員の平均年齢は、およそ31歳であった。ペインは41歳であり、年長の職員であった。

この橋梁は、彼ら全員が初めて経験する仕事であり、お互いになじみがなかった。これまで経験したこととまったく違う仕事になることは、全員が認識していた。しばらくして、シンシナティ橋の建設に従事していたこともあり、辛辣で臨機応変なE・F・ファリントンが、機械工長に任命された。だがこの時点で、それまでにローブリング橋梁、すなわち吊形式の橋梁の建設に従事した経験があったのは、技師長だけであった。彼でさえ、このような特殊な橋梁で現れる様々な

⁴ [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:LOSSING\(1876\)_p258_GRAND_CENTRAL_DEPOT,_NYC.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:LOSSING(1876)_p258_GRAND_CENTRAL_DEPOT,_NYC.jpg)
（参照日 2016-03-15）

問題に対処した経験はなかった。

それでも最終的な決断をしたのは、ワシントン・ローブリングであった。そして、どんなにスタッフが彼を助けても、あらゆる重要な決断は、彼が最終的に行った。そしてこの段階で、実施すべきあらゆる決断の中で、どの決断が長い目で見ると重要事項となっていくかを識別する確実な方法は、ほとんどなかった。さらに、ローブリングには、取締役会や全権を有する執行委員会、両市の役人、年配のホレイショ・アレン（図-7.5⁵）等に対応する役目があった。そのホレイショは、吊橋の建設経験がなく、事業については何の知識もないくせに、自分が選択するような場合には、やたらと権力を振り回すとの評判がある高給取りの技術顧問であった。

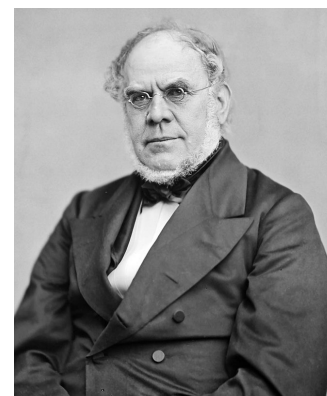


図-7.5 ホレイショ・アレン
(1802~1889)

ローブリングは、新聞や数社の専門誌が好んで紙面を提供した一夜漬けの専門家からの批判にも対応した。サミュエル・バーズ・B・ノランという狂気じみた人物が、サイエンティフィック・アメリカン誌で、滑りやすい天候では荷車にとって橋が急勾配過ぎるので、中央径間を低くすることになり、事業全体が完全な失敗となるだろうと強く主張した時期は、彼の父親が亡くなった直後であった。その主張が不合理であることを、ローブリングは理解していたが、1件のそのような記事についても、その理由を説明するために、数人の影響力ある政治家や慎重すぎる取締役役に対して、数時間を浪費することになった。

彼が必要なことを実施するために、特にそれが当初の計画から変更する場合、あるいはそのように見える場合、正式な書面で自らの推奨案を提示する必要があった。工事が進むにつれて、途中のありとあらゆる段階で説明する必要があり、執行委員会宛ての長い報告書の中で、彼のあらゆる決断内容に関する理由を述べていた。これらは、詳しく公正で、なおかつ非技術系の同僚が理解できるような言葉で、完全に説明する必要があった。あらゆる報告書が公的文書にもなることを彼は認識しており、その責任者としても市民の信頼を保持するために、何があろうとも工事ばかりでなく各々の報告書にも、十分な説得力が求められた。物事がうまく行かなかったり、粗悪材料が判明したり、設備が壊れたり、予定より工事が遅れたり、構造自体の数箇所に欠陥があったり、会計の不正操作があったり、工事費の抑えが効かなくなったり、部下の判断に誤りがあったり、事故が発生したりすれば、責任を負うのは彼であった。やがて、約千人の男たちが彼の指示で働くこととなる。

この時点で実施すべき計画の中での最重要事項は、最も一般的な類いのこと、すなわち彼の父が検討していなかった詳細構造を決めることであった。

それは途方もない規模の責任であり、専門的な年輩の技術者や能力のある技術者もいたが、彼らにそれができるとは思えなかった。だが、ワシントン・ローブリングは、一瞬のためらいを示

⁵ https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hon._Horatio_Allen_-_NARA_-_526419.jpg (参照日 2016-01-12)

すことさえ全くなかった。それまでに彼は、軍事用の2橋梁を除いて、橋梁の全責任、すなわち絶対的な最終決定権を持ったことはなかった。

それまでのところ、彼は、自分の部下や、企業と関係するいずれの私的団体の信頼を得るようなことを、何もしていなかった。彼は父親が指示した態度をずっと保持していた、だから、橋梁建設で何かを企てている人々には、手の出しようがなかった。さらに、おそらく彼は、最初から気づいていたので、自分が行うどのような事でも、父ならこうしたであろうという観点から判断していたはずである。彼は絶えず父親と比較され、彼の発言や約束について責任があった。彼がどんなに適切に成し遂げても、どんなに一生懸命頑張っても、それは常にジョン・A・ローブリングの橋梁だからと見做された。失敗すれば、全てがワシントン・ローブリングの責任であった。

言うまでもなく、彼が父親のような人物であることを立証できるかどうか、その時点では大きな問題であった。

32歳のワシントン・オーギュスト・ローブリングは、多くの面で父親にとっても似ていたが、また全く異なる面もあった。ジョン・ローブリングは、ヨーロッパ人、より厳密に言えばヨーロッパの知識人、本質的には鍛練による完璧主義者、そして、彼自身の信念を上流階級での才能として認めるとすれば貴族であった。ジョン・ローブリングは、あまりにも厳格で、ひどい気質で、天才として広く認められていた。

その長男のワシントン・ローブリングは、穏やかな態度で、堅苦しくない思いやりのある男性であり、彼自身も言っていたように、父の標準からすれば、まさに少し怠惰な気性であった。家族は、彼の気性が母親似であると言っていた。家族が言うように、彼には母親のような人に対する寛容さや穏やかさがあった。彼はとても聡明だったが、そんなに輝くほどではなく、天才でもなかった。そして彼には父のような独創的な創造力がなく、これが2人の大きな違いであった。なお、妻のエミリーが書いているように、彼はとても多才な技能の持ち主であった。彼は、一流の古典学者であり、数か国語に精通し、すばらしい音楽家でもあった。必要な場合には、しっかりと考えを口に出すことができ、父より心を開いたすばらしい対応をすることができた。彼は、同僚達の表面的なものより、むしろ内面的な面にかなり多くの関心を持っており、父親のような威圧的な態度をとることは全くなかったけれども、人々と一緒に働くことは、はるかに上手であった。何かにつけて、彼はとても人情味があった。

ワシントン・ローブリングは、専門的な面では、同僚達と同じような技術力があつた。すばやく計算ができ、素晴らしい製図工であり、詳細事項にも精通し、父親と同じ完璧さを目指す情熱を持っていた。そして、父親と同様に、かなり多くの肉体的勇氣（肉体的な苦痛などに直面したときに試される勇氣）があつた。しかし、自分を創造的な天才とは考えたことはなく、常にどこでも他人にそのような印象をあたえる態度をとることはなかった。妻は、彼のことを「礼儀につ

いてはむしろ無頓着」と言っていた。彼は、父ローブリングが自慢である一方で、父の慢心をほとんど受け継がなかった。このことが、彼の見方によれば、同じような名声を得るチャンスを大きく減らしたようである。彼は「歴史は我々に、自分の気質の中に多少の慢心を持たないと、立派な人にはなれないと教えている。・・・立派な人物になろうとする人には、たとえ他人を感動させる目的しかなかったとしても、自分自身の適切な意見を持つことも必要である」と後に書いている。

一見したところ、ワシントン・ローブリングは、むしろ寡黙のように思われるが、好感の持てる人格で、ほのぼのとして気取らず、魅力的なほど謙虚であった。彼の名前は別にして、実際に初対面で並外れたものを感じることはなかった。父親のような強い印象を与える人物ではなかった。彼の父親は、さらに何よりも偉大な人物のように見えた。

しかし、当時の仕事を行う能力に関して、絶対的で全幅の信頼性を有しているという点では、2人は全く同じであった。

人の気質は遺伝やその一部で決定されると、ワシントン・ローブリングは深く信じていた。彼が「ローブリング魂の特色」と呼んでいるものについて書き遺している。それは、人が何かをしようと考えた時、他人から助言をもらうこともできず、それを言っても一般に拒否されるような場合など、他の方法がまったく無い時でも、そのことをやり抜こうとする意志の強さであった。この「思い上がった独立独歩」の性格は、ローブリングも持っていた家族の気性であり、オランダ人の普通の頑固さよりもひどく、長所と同程度の障害でもあった。しかし、彼は「人がありがたいと思わないことまで、全てのことを継承すると言うのであれば、それは問題である。一般的な単調な人生ではそうかもしれないが、各世代では、次々と全く異なる状況や環境が生じてくる。このようなことに対しては、「次世代の人間」が継承した気質に自らを適応させ、克服し、自らの道具として利用するような力量を身につけるように対応する必要がある」と述べている。

彼は、6歳くらいから「次世代の人間」と言われ始めたが、父親と違って、古代の城壁に守られた都市で育ったわけでもなく、哲学で自分を満たしたわけでも、一部の遠い理想郷での将来の解放を夢見たわけでもなかった。彼はアメリカ人として成長しており、ワシントン・ローブリングと有名な父親との最も明白で重要な違いは、まさしくそれであったに違いない。さらに彼は、その世代のアメリカ男性にとって最も特徴的で影響の大きな2つの体験をしていた。その一つは、地方の発展の遅れた地域で少年時代を過ごしたことである。そこは開発されてから歴史も浅く、依然として貧しい地域であった。もう一つは、南北戦争を経験したことである。彼が、父親とは違って、アメリカの農場の若者であり兵士でもあった。これら2つの経験が、彼が言ったように、自らの気質を決定づける重大な役割を果たした。

またそれ以外に、ジョン・A・ローブリングという父親のもとで、成長したことも挙げられる。

ワシントン・ローブリングの1867年5月27日付パスポートには、ウィリアム・H・スワード⁶の署名があり、次のような身体的な特徴が記されている。「年齢：30歳，身長：5フィート9インチ（175cm），前額部：広い，目：軽い灰色，鼻：短い，口：小さい，顎：四角，髪：明色，肌色：色白」

数年後に交付されたパスポートでは、彼は1インチ(2.5cm)背が高くなっており、その記載によると彼の目は青となっている。しかしいずれにせよ、さらに印象的な容姿は、セオドール・ライマンという北軍の大佐の戦時中の手紙のなかの1通に記載されている。その大佐は、ジョージ・ミード將軍の参謀を勤めた人物である。

ローブリングの特徴は、次のようである。彼の髪は明色で、目は青く、誰も眼中にないように落ち着いている。彼の乗馬は、鐙（あぶみ）の位置を足指の先端がちょうど触れるほど長くして、ものすごくかがんだ姿勢である。そして、彼は長靴を履かないので、ズボンの裾はいつも破れて、ぼろぼろである。彼は、最も危険な場所で敵の位置を探し出し、いつも全く何でもないような素振りを見せて、引っかけ回しに行く。彼の会話は礼儀正しい言い回しだか、短くて飾り気がなかった。

ミード將軍が「その髻は、どのような状況か？」と叫ぶ。「知らなくて結構です。そこは、何でもありません」と彼は簡潔に答える。

一般的な考えに反して、彼にジョージ・ワシントンという名前はつけられなかった。理想主義的な若い移民のジョン・ローブリングは「新しい共和国の歴史で自らが最も影響を受けた名前」を最初の息子の名前として、「あがめるように選んだ」と言われている。だが息子自身は、別の話をしている。彼の名前は、バージニア州リッチモンド出身のワシントン・ギルの名をとって命名したとのことである。その人物は、彼の父親がアレゲーニー山脈の鉄道線路の敷設を手伝うために雇った測量士であった。ワシントン・ローブリングは「私の誕生の知らせが届いた時、彼らは山の頂上に座っており、ギル氏は自分の名前にちなんで名付けるように頼んだようである。ギルという部分は使われなかったが、ワシントンという名前で、私はそれ以来ずっと悪戦苦闘している」と書いている。

彼は1837年5月26日に生まれた。彼は、その当時の父親の不在を、いかなる意味でも軽視や天啓と考えたとしても、そのような発言をすることはなかった。また洗礼命名式で、牧師の不在に困ることもなかった。「私は、・・・郵便局長のシリー氏から洗礼を受けました。そこには、まだ牧師はいなかったからです。でも、そのことでの悪影響はでていません」。6歳になった時、父親は彼のことを「頑丈な、しっかりした、おとなしい少年」と説明している。

⁶ ウィリアム・ヘンリー・スワード（1801～1872）は、ニューヨーク州出身の政治家であり、ニューヨーク州知事とアメリカ合衆国上院議員を務め、エイブラハム・リンカーンとアンドリュー・ジョンソン両大統領の下で国務長官を務めた。

自宅から対角線上の街路の向こう側には、父親が建設した教会があった。その向こう側の大きく広がった農地には、最初の入植者が植えた果樹園があった。しかしいまだに、黒っぽい樫の木を中心とする大木の原始林や、動物達がいっぱい住んでいる低木の二次林も広がっていた。彼は「1845年になっても、黒クマが大通りに出てくることがあり、私は逃げた」と付記している。

社会生活は明らかにドイツ風であり、マナンガヒーラのライ麦が、生命の糧と考えられていた。娯楽として、人々は自宅で芝居、あるいは小規模なパーティーや舞踏会を行った。ベルリーナがバイオリンを、ウィッケンハーゲンがヴィオロンチェロを、ネーアーがホルネット（金管楽器）を、ローブリングがフルートとオルガン（鍵盤楽器）を演奏した。

生粋のペンシルベニア人は、彼らをラテン農民と呼んだ。それは、彼らが農業のことより、多くのラテン語を知っていることを、意味したものである。面白い話には事欠かなかったと、ローブリングは思い返している。隣には、フェルディナンド・ベーハーというミュールハウゼン出身で立派な書齋を持っていた羊毛の毛羽立て職人と、アイゼンハートという義理の兄弟が住んでいた。アイゼンハートは、ワテルローでフランス軍の攻撃に対して、ハウゴウモント城を固守した連隊に所属していた。ベーハーは、ワシントン・ローブリングをととても可愛がってくれるので、幼い少年は毎日に隣家に遊びに行っていた。そして、決して壊れることのない大きな樫の木の扉に、フランス軍の弾丸が雹（ひょう）のように打ち込まれる様子を、アイゼンハートが何度も繰り返して話すのを聞いていた。

南北戦争の1年ほど前、ワシントン・ローブリングは、ピッツバーグに住み、アレガニー川橋梁の現場で父親と一緒に働いていたとき、祖母のハーティングを訪ねて、サクソンバーグに戻ったことがあった。父親は一緒に戻ることを拒否した。それは、ワシントンにとって大変がっかりする体験であり、自分も必要以上に戻ろうとは心から望まなくなった。子供にとって、生まれ故郷は世界中で最も素晴らしい場所のようだと、彼は述べている。

どこの家へも入ることができた「ローブリング少年」には、そこの人々が持って来た多くの先祖伝来の家財が珍しかった。それは、不思議な古時計、古い聖書や本、古風で趣のある絵、銅・真鍮・磁器製の斬新な調理具、長いドイツパイプなどであった。祖母ハーティングは、表面に彫刻が施された木製の旅行鞆を持っていた。その内側には、ナバリノの海戦でトルコ艦隊が燃え上がった状況を示した絵が貼り付けられており、それを見るのが楽しみであった。同じような絵として、カツバツハの戦いで、ブリュッハー元師がフランス軍を撃退している場面の絵もあった。

少し離れた農場には、ベナンゴに向かう古いインディアン小路が明確に残っていた。その小路を、デラウェア族やショーニー族・セネカ族・マンシー族が、だれも知らないほど昔から使っていた。ジョージ・ワシントン自身も、その路を徒歩で旅したことがあった。グラヴァーという年配の鍛冶屋は、バトラー郡初の移民として知られており、その当時まだ生きており、ものすごい尊敬の的であった。彼はフォージ溪谷に住んでいた。また、おそらく郡内で最も有名な人物は、

バッファロー郡区で亡くなった老婦人である。その郡区の話は開拓者の伝説の一部であり、それを聞いてローブリングは成長した。彼女の名前は、マッシー・ハービソンといった。1792年に、彼女は、セネカ族とマンシー族に捕えられた。彼らは、彼女の目の前で彼女の2人の子供を殺害した。その後、彼女と残った1人の幼い子供を彼らの前面に引き出し、森の中を進む悲惨な強行軍に出発した。しかし、彼女は何とか逃げ出して、生きるために信じがたいほど疾走し、赤ん坊を連れて荒野の中を4日間移動した。彼女が半死の状況でピッツバーグにたどり着いたとき、彼女の足から150本以上のとげが引き抜かれたことが、信頼できる話として記録されている。

サクソンバーグは、春にカナダに向かうリョコウバトの毎年の飛行ルート上にあり、ハトが空を埋め尽くす光景を、ワシントン・ローブリングは生涯に渡ってよく話していた。その小さい町はものすごい雷雨が発生するところであった。また1843年には巨大な彗星を見るため、夜遅くまで、メイン・ストリートの麓を先頭に最後尾の教会の屋根の上まで、人々が殺到した。

妊娠中の母親が家族を引き連れてトレントンへ引っ越した時、ローブリングは12歳であり、東部の仕事にかかりきりの夫が不在での移動であった。ローブリングは、弟のフェルディナンドとともにトレントン学院に入学し、その後5年間、学校生活を楽しんだようである。彼はバイオリンに親しみ、天文学と鉱物学に興味を持ち、技術的な職業につくことを決めた。しかしながら、それについては、多くの選択肢はなかったようである。

かつて1853年の冬、彼は父親と一緒に、ニューヨークに出かけたことがあった。ナイアガラ橋の工事は春まで中断しており、父は他の事業を引き受けていた。理由は明らかではないが、彼らはブルックリンに渡ることになり、乗船したフェリーが途中で氷にとざされ、気が滅入るような数時間を過ごした。彼の父親のような激しい気性の男性にとって、そのような自然現象に翻弄されるということは、間違いなく苛立たしい経験であった。だが、その結果として、ジョン・A・ローブリングと一緒にいた息子には、その場で心の眼に橋梁が見えたという話である。

17歳になったワシントン・ローブリングは、技術を習得するためにトロイに向かった。トロイこそが息子のための場所であると、父親は以前から決めていた。

トロイのレンセラー工科大学は、アメリカで初めて「理論的かつ実践的な科学」の教育を行うという特定の目的で設立された新しい種類の学校（図-7.6⁷⁾であった。そ

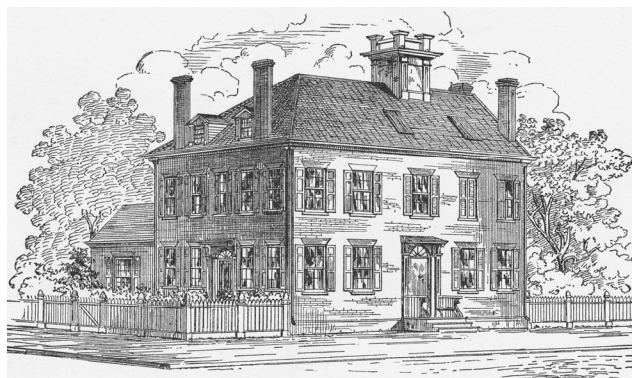


図-7.6 レンセラー工科大学（1824年頃）

⁷ レンセラー工科大学（Rensselaer Polytechnic Institute、略称：RPI）は、ニューヨーク州トロイにある私立工科大学であり、1824年に設立された英語圏では最古の技術系大学である。

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rensselaer_School_1824.png（参照日 2015-01-31）

の学校は、約 20 年前に、ハドソン川の大地主⁸で政治家のステイブン・バン・レンセラーによって創立された。彼は、大望を抱いた青年のエネルギーが、あまりにも長い間、一種の文学的な面だけに注がれていたと考えており、エイモス・イートンという著名な地質学者を初代の学長とした。ワシントン・ローブリングが入学した頃、学校は、トロイとハドソン川を見渡す急な丘の上に建てられた煉瓦造りの小さな建物群であった。その学校は、国の中でも、土木工学のコースを設置している極めて少ない学校のうちの1校であった。そこには、全員で 100 人を少し上回る程度の学生がおり、制服はダークグリーンの布製帽子と、それに合わせたビロード襟のフロックコートであった。

トロイで撮影されたローブリングの 1 枚の写真 (図-7.7⁹) ある。彼は、当時 19 歳、とてもハンサムで頑丈そうな若者で、父親ゆずりの顎で、かなり情熱的な目つきをしている。彼自身は、全体的にとっても子供じみていると考え、髭を伸ばそうとしたが失敗に終わった。



図-7.7 ワシントン・ローブリング

妹ローラは「兄さんが、そんなに欲しがる口髭を望みどおりに生やそうとすれば、勧められることは、たったひとつです。すなわち、毎日髭を剃って、生やしたい場所にグアノ¹⁰を少し塗ったらどうかしら、そうすれば、たぶん、すぐに、ふさふさした口髭が生えてくると思うわ」という手紙をトレントンから送っている。

学業自体は、とても難しかった。一度、チャールズ・スワンへの手紙で、彼はハドソン川での水泳に触れたことがあったが、それ以外、勉強以外のことは何もしなかったようである。彼が家族から期待されていたことや、学校から求められたことを考慮すれば、それは驚くことではない。彼の卒業研究は「吊構造の水道橋の設計」に関するものであったが、3 年間でほぼ 100 科目の様々な科目も習得する必要があった。そのなかには、立体幾何学、微分積分学、変分法、定性的・定量的解析、限定鉱物学、高等測地学（地球的な寸法や形状に関する数理科学）、論理・修辞論、フランス語の作文と文学、正投影・球体投影論、音響学、光学、熱学、採鉱地質学、古生物学、個体・流体力学、球面天文学、運動学（質量や力の影響を除いた運動の学問）、機械設計、油圧原動機論、蒸気機関、構造安定論、構造工学・設計建設論、論理哲学が含まれていた。

1 世紀後、著名な橋梁技術者で土木工学の教授である D・B・スタインマン¹¹は「そのようなカリキュラムの下では、今日の平均的な大学生では、眩暈がするほど当惑することになるでしょう。そのような初期の時代には、大学が大量生産に着手する前であり、技術者教育はまさしく試行段

⁸ オランダ治下のニューヨーク州およびニュージャージー州で領主的特権を得ていた地主

⁹ <http://www.rpi.edu/dept/NewsComm/sub/fame/image/roebling.jpg> (参照日 2016-03-18)

¹⁰ 海鳥やコウモリなどの糞が海岸や洞窟に堆積したもので、肥料として用いられる。

¹¹ デビッド・バーナード・スタインマン (1886~1960 年) は、アメリカ合衆国の構造エンジニアである。マキナック橋の設計や多数の著書や詩作で知られる。アメリカ国内だけでなく、タイ・イギリス・イタリア・ハイチ・プエルトリコ・カナダ・韓国・イラクの橋にも携わっている。1948 年から、スタインマンと彼の事務所は、ブルックリン橋の改修を担当している。

階であり、最も厳しい一生の仕事に対する鍛錬であり、徹底した知的修行であり、専門的な支度でした。ものすごく優秀ですごい大望を持った人だけが、遅れずについて行くことができ、その試練を生き残ることができたようです」と記述している。

しかしながら、ずっと後にローブリングがその教育システムを評価した時には、異なる見解であった。彼が「その年頃では、教育内容を吸収する能力のない若者の頭の中に、形状や事実を雪崩のように詰め込むようなひどく単調な教育」と指摘したような教育の仕方について、彼は全く価値を見出さなかった。彼は「記憶することができても、消化することができないような、役に立たない種々雑多な知識を忘れないようにすることで、さらに忙しかった」と述べている。それは過大な負荷であった。彼の同期生は、入学時には65人であったが、卒業時には僅か12人であった。卒業できなかった学生の中には、数人がかなり重症の心身衰弱になり、そのうち1名は自殺したようである。

ローブリングにとって、自殺は初めての悲劇的な実体験であった。何があったか全てが明らかではないが、1856年の秋の終わりにトロイでの最終学年時に一人の同級生が自殺し、彼のローブリングへの思いがその原因であったようである。書面として残された事件の記録には、南北戦争中にローブリングがエミリー宛てに宛てた1通の手紙と、不幸な青年が自殺する直前に書いた絶望的な2通のメモがあり、それら3通の全てをエミリーが保存していた。

その事件から10年近く経って、ローブリングは、バージニアからエミリー宛てに「私のロウソクは、間違いなく魔法にかかったように、5分ごとに消えてしまいます。それが、まさに誰かが作り出した完璧な霊魂でなければ、ロウソクの芯に何かがあるのでしょうか。その現象は、愛する貴方に手紙を書いている間、ずっと私を悩ましています。貴方の昔の恋人で、誰か亡くなった人はいますか。私の精神哲学の腕が鈍っていなければ、私はすぐに謎を解くでしょう」と書いている。

彼は「私には、話をしてみたい霊魂となった友人が1人だけいます。彼が私といっしょ写った写真を、貴方は持っています。彼が私を愛したけれども、私はその気持ちに十分に応えなかったもので、彼は自殺しました。私は、例えば貴方のような人を見つけるように、彼に勧めました。でも彼は、自分の愛を十分に理解してくれる女性がいないと、いつも言っていました」と続けている。

それが、ローブリングがその話題について書いたと思われる全てのことである。その部分は、きちんとしたカッパープレート体文字で書かれたほんの短い段落で、バージニアで夜遅くに書かれたラブレターの最後のページに、橋梁の建設や日々の悪態をついた話の後に出てくる。

別の2通のうち最初の手紙は、ドイツ語で1856年10月5日の夕方に書かれたものである。明らかにその日は、2人の間で正式な絆を持つ宣言をしようという友人の申し出を、ローブリングが拒絶した後である。それを書いた人物は、ローブリングに自分の気持ちと胸の苦しみ理解するように懇願し、それを大目に見るように頼んでいる。「僕達の性格は、全く違っています。私には

当たり前としか思えないことでも、おそらく貴方には、理解できない滑稽なことに思えるかもしれません」と書き、自分のために、自分だけのために、ローブリングの好意を明言するよう再度、懇願している。その手紙には、「貴方の友人」と署名されているが、その名前の部分は、ローブリングによるものか、それを書いた青年によるものかは分からないが、削除されている。それでもローブリングは、彼から頼まれたことに同意する気は、全くなかったようである。

次の手紙は、感謝祭（11月第4木曜日）に書かれている。その手紙の最初の部分の写しだけが残されている。それは、後日、ローブリングが記憶を頼りに書き残したものである。青年は、どうやら麻酔剤としてクロロホルムを摂取し、ローブリングがその状況の彼を見つけ出して、過剰投与から彼を助け出す方法を、ローブリングに説明していたようである（「・・・私の頭に冷水をかけて、君の口から私の肺に呼吸を吹き込んでください。それが、うまく行かなければ、ボンテコン博士を呼んで、私の頸部にカップング療法¹²を施すよう教えてください。最後の手段として、電磁気をためてもらってもいい・・・」）。続いて彼は「貴方の努力が、実を結ばないとわかったら、こうしてください。私のもので欲しいと思うものは何でも持って行ってください。全て君のものです」と書いている。

ローブリングは、その手紙に「この時の私は、彼の手紙で急に動揺し、自分がどうして彼と付き合わないのかを自問しました。そして私は彼の部屋に向かいました。彼は、私がお手紙を写さないように、後になって取り戻しました。残りの部分は、恋人との若干の別れの言葉といっしょに、単に彼の所有物の目録が書かれていました」と書いている。

青年が、まさにいつ亡くなったかとか、どのようにして亡くなったかは、わからないままである。だが、全面的に悲惨な事件は、ローブリングにとって恐ろしい体験であり、その後ずっと不快な記憶として残ったようである。またそれは、レンセラー校で規定している生活規則に関して、後に彼が述べたような苦々しい感覚の大部分の原因かもしれない。彼は「おおげさな言い方をすれば、卒業した人達のなかの数人でさえ、精神的に廃人同様になって学校を去っており、私自身の症状がとても明らかな反証である」と書いている。

その年の夏に大恐慌¹³が始まった1857年、彼の父親が初めてイースト川の橋梁計画を提案し、ウィリアム・キングズレーがブルックリンへ移り、ヘンリー・マーフィーがオランダに向けて出航した。そのような状況の時に、ローブリングは大学を卒業し、少年時代を過ごしたトレントンに戻った。

¹² カップング療法とは、吸い玉療法、吸角法などとも呼ばれ、東洋でも西洋でも行なわれてきた伝統的な身体治療方法である。ガラス容器（吸い瓢、吸いふくべ、吸角）にアルコール類を入れて燃やし、皮膚に吸いつかせてその部分をうっ血状態にして、治療に役立てる方法である。

¹³ 1857年恐慌は、19世紀半ばのアメリカ合衆国で国際経済の退潮と国内経済が急拡大したことから生じた金融危機である。1850年代までにグローバル化が進み、1857年後半に始まった金融危機は初めて世界規模の経済危機になった。1857年9月から始まった景気低迷は、長くは続かなかった。しかし、適切な回復となると南北戦争以後まではなかった。

ワシントン・ローブリングの最初の仕事は、工場内の運営であり、実際にすぐさま自分で全てのことを仕切っていたようである。なお、彼の父親とチャールズ・スワンの2人とも、他の仕事で不在であった。その後、1858年の春、彼はピッツバーグに向かい、父親と一緒にアレガニー川橋梁の工事に従事した。彼の俸給は、年800ドルであった。

ワシントン・ローブリングは、その後ピッツバーグに2年間滞在した。そして、その場所を大いに気に入り、彼の家族宛に、ここを去らねばならない日がくるのは残念であると書いている。彼は、チャールズ・スワンに「ピッツバーグでは、現時点でとてもきちんとして暮らしています。ここでは、おそらく貴方の謙虚な使用人以外には、怠惰な男性はいないように思います」と報告している。彼の話によれば、彼にはトレントンの10倍の友人がいた。彼は「ペンシルベニア州ピッツバーグで私が紹介された人物リスト」と名づけた小さなノートを持っており、工事業者や金物商の名前に混じって、マクルーア嬢やカール嬢、メンデンホール嬢、ブレイク嬢、チェンバーズ嬢のモリー・スミス嬢などの名前があった。

ワシントン・ローブリングは、ペン通りにある下宿で生活し、一生懸命に働き、ほかの下宿人とチェスを楽しみ、オペラに行き、午前6時30分という相変わらずの作業開始について父と議論し、一連のひどい腹部の発作は治っていた（治療は、生卵と温水、松脂を使った父のひどい混合飲料であった）。また彼は、仕事以外で自分の周りで起きたことについて、熱心にユーモアを交えて説明する長い手紙を、家族宛に書いていた。彼の父親は、決してそのようなことをしたことがなかった。

ワシントン・ローブリングは、デューケーヌ砦¹⁴占領の100周年記念日の祝賀会で、エドワード・エバレット¹⁵の話聞いたこともあった。彼は、至る所で建設中の鉄骨の建物のこと（改善のためにうってつけの人物がここにいる等）や、橋梁の一部を吹き飛ばした嵐のこと、太陽が照らずにガス灯が4.25ヤード（3.9m）間隔で点灯されるような暗く曇って煙の多い午後のことを、手紙に書いている。彼は、ある手紙で次のような書き出しをしている。

これは、皆さんに宛てた1860年の最初の手紙です。だから、とても短かく書きます。なぜなら、小さく始めて大きく終わるといふ昔からの良い慣習があるからです。そして、私は年末頃まで、ここにいるつもりはないので、いつも短い手紙になると思ってください。シンシナティ出身の従兄弟のヘンリーが、昨日こちらに来ました。現在の彼は、とても立派な青年で、まったく魅力的です。彼は、11.5インチ（30cm）の山羊髭を生やしており、まさに私が生やそうとしていたような髭です。

¹⁴ デューケーヌ砦の戦いは、フレンチ・インディアン戦争中の1758年9月14日に行われた戦闘である。この砦の周辺の町がピッツバーグと呼ばれるようになった。

¹⁵ エドワード・エバレット（Edward Everett, 1794～1865）は、アメリカ合衆国マサチューセッツ州の政治家。ホイッグ党に所属し、連邦下院議員、連邦上院議員、ハーバード大学学長、駐イギリス特命全権公使、マサチューセッツ州知事、アメリカ合衆国国務長官を務めた。1860年大統領選挙では立憲連合党の副大統領候補として立候補した。

1860年の秋、ワシントンはアレガニー川橋梁の工事を完了して、ワイヤー工場に戻った。次の春、彼は軍服姿で、トレントンの埃っぽい軍事訓練場で行ったり来たりする行進をしていた。

後に彼は「私の入隊は、かなり突然でした」と語り、父親が、彼を家の外へ連れ出した夜を思いだしている。彼と父親との絶縁状況は、その後4年間も2人がお互いに会うこともなく、どんな形でも連絡しなかったほど、腹を立て気分を害していたと、他人には言われている。しかし、そのようなことはなかった。ローブリングは、南北戦争の間に数回トレントンに戻っている。一方、彼から父親への手紙は、これまで通り完全に型通りであり、父親からの返事も同様であった。ローブリングがエミリーと知り合うまで、他の誰よりも、父親に多くの事を話していた。

1861年4月16日、ワシントンは、ニュージャージー州市民軍の兵卒として入隊した。2ヵ月後に守備隊任務に飽き飽きした彼は除隊して、あらためて兵卒としてニューヨーク軍に入隊した。1865年1月、彼は、ほぼ戦争が終わったところに27歳の少佐で陸軍を除隊した。彼は、第二次ブルランの戦い¹⁶やサウス・マウンテンの戦い、アンティータムの戦い、チャンセラーズビルの戦い、ゲティスバーグの戦い、ワイルダーネスの戦い、スポツィルバニアの戦い、ピーターズバーグのクレーターの戦いを経験した歴戦の軍人であった。

ワシントン・ローブリングが戦争中に書いた手紙は何百通にもなり、バージニアでの軍事作戦の歴史に関する驚くべき個人的な補足説明を記述しているだけでなく、青年時代の彼自身のこともとたくさん記述している。一方、ブルックリン橋を建設していた時期には、個人的な手紙を書くことは、ほとんど無かった。それは、彼の傍に常にエミリーがおり、父親も亡くなり、彼の弟や妹達は家を出て、各自が成人としての生活を送っていたからである。

ワシントン・ローブリングの戦争一年目は、昇進とそれに伴う異動を除いて、平穩無事で期待外れであった。彼は首都ワシントンからの手紙で「駐屯地で、ぼやっとしていることが、主要な仕事のように」と書いている。後に、ウエスト・バージニア州のハーパーズ・フェリーから、彼は、妹のエルバイラに「ここは、モーリスビルの大きさぐらいで、しみったれた小さな町で、さびれて眠っているようで、まるでバージニアの町のような様子です。ジョン・ブラウン¹⁷は、私たちの隣のトウモロコシ畑で絞首刑になりました。絞首刑の場所はトウモロコシの茎によってマークされており、絞首刑の部品が1ポンド(0.454kg)につき1ドルで売られています」と語りかけている。

¹⁶ 戦いの時期は次のようである。第二次ブルランの戦い(1862/08/28~30)、サウス・マウンテンの戦い(1862/09/14)、アンティータムの戦い(1862/09/17)、チャンセラーズビルの戦い(1863/04/30~05/06)、ゲティスバーグの戦い(1863/07/01~03)、ワイルダーネスの戦い(1864/05/05~07)、スポツィルバニアの戦い(1864/05/08~21)、ピーターズバーグのクレーターの戦い(1864/07/30)。

¹⁷ ジョン・ブラウン(John Brown、1800~1859)は、アメリカの奴隷制度廃止運動家であり、バージニア州に対する反逆罪で裁判に掛けられ、1859年12月2日に絞首刑に処せられた。この処刑が、16ヶ月後の南北戦争開戦の重要な原因の一つとなっている。

しかし、戦いが始まった時でさえ、ワシントン・ローブリングは軍務面について話すことは、ほとんどなかった。彼は「この大砲扱う仕事は、とてもたいへんな作業です」と書いており、唯一これだけが軍務に関する記述である。

ワシントン・ローブリングは4ヵ月後に軍曹に昇進し、最初の冬をポトマック川の下流のメリーランド州バズ・フェリーで過ごした。その地域で彼が担当した砲台は、バージニア海岸にあるアメリカ連合軍（南軍）砲台から船舶を守ることになっていたが、何も起こらなかった。彼は「10の優れたスポーツ」であるテント製住居で宿泊しており、唯一の印象的な行事は「河川の堤防を下った場所のメーソン未亡人宅での音楽の夕べ」であった。音楽は、歌とピアノ、ギター、ローブリングのバイオリンで構成されていた。（メリーランド州のこの地域としてはとても立派な）夕食が提供された。アメリカ連合軍（南軍）砲台から2〜3発の砲弾が駐屯地内に着弾したが、爆発することはなかった。何年も後に、一緒に演奏した音楽家の1人が、ローブリングはバイオリンに詳しくないと、書いている。

1862年2月、ワシントン・ローブリングは陸軍中尉に昇進し、その翌月にはバージニア州ハンプトン・ローズにいた。それは、ブルックリンで建造された装甲艦モニター号と、アメリカ連合軍（南軍）の装甲艦メリマック号の戦いを確認するのに合わせて出向いたものであった。その当時、彼は父親の代理として、彼自身の最初の橋梁を設計・建設中であった。彼はマクダウェルの参謀に移籍しており、バージニア州フレデリックスバーグのラッパハノック川を渡る吊橋梁を建設する命令を受けた。「父は年を取りすぎており、その任は厳しかったので、私が選ばれた」。彼には、建設のための経験豊かな補佐役も適切な機材もなく、トレントンから送られたローブリング製ケーブル数巻を除き材料もなかった。その時点で、敵軍とはわずか5マイル（8km）しか離れていなかった。

ワシントンが設計した橋梁は、1000フィート（305m）を越える長さで、ナイアガラ橋梁よりも長かったが、言い換えるとおよそ14組の短径間に分割されていた。彼は、南北戦争中北軍の戦線内に逃げた黒人奴隷を雇い、彼らが架橋作業をできるように訓練し、建材をアレキサンドリアから回送しておいて、1箱のプランテーション葉巻で燻して、1ヶ月で橋梁を完成させた。

その直後、シェナンドア川に別の橋梁を架けるために、バージニア州フロント・ローヤルに向かうよう命令された。測量作業で川を渡るために利用可能な小舟が無く、彼は口に巻尺をくわえて川へ飛び込み、泳いで渡った。しかし、彼と工作部隊が橋梁を半分ほど架設した時、ジャクソン將軍率いる連合軍（南）軍は、彼らを撃退させた。ワーテルローの別の橋梁も同様の運命をたどった。その一方で、フレデリックスバーグから退却する北軍のバーンサイド將軍は、そこにあったローブリングが架けた橋梁を爆破した。その橋は、架設に要したと同じぐらいの期間しか持ちこたえられなかった。

さしあたって、それでワシントン・ローブリングの橋梁建設は終了した。次に彼は、騎兵隊の遠征を命じられ、その移動には10日間程かかり、その間ほとんど鞍から降りることはなかった。

一度は朝の5時頃、朝食中の南軍のジェブ・スチュアート將軍を奇襲して、すんでのところを彼を捕らえるところであった。

第二次ブルランの戦い¹⁸がそのあとに続き、ローブリングは、その間ずっとマクダウェル將軍の側近参謀として彼と共に行動した。1ヵ月も経ずしてアンティータムの戦い¹⁹における恐ろしい大虐殺で、彼は死にかけた。その後、ハーパーズ・フェリーにもどり、新たな吊橋を建設した。そして、若いスローカム將軍が精銳の部下50人を連れて見学にやって来て、戻っていった状況を、父親に伝える手紙を書いている。ただし12月までに、彼はその工事を完了させた。彼はチャールズ・スワン宛に「橋梁は、私が最初に予想したより、より堅固でしっかりしたものになりました。トラス製高欄が無くともとても剛性があり、騎兵隊と強風によってかなり厳格に試験されました」と述べている。その橋は、彼がブルックリンに来るまでに、彼一人で手がけた最後の橋であったが、後に彼は「ハーパーズ・フェリー橋は、他の橋と同じ運命をたどった。南軍のリー將軍がゲティスバーグに進軍した時、吊材が切断されて床組が河に崩落したが、私は完全にそれを再建し、分隊がその上を行進していった。次の年、南軍のジュバル・アーリー將軍は、その橋を完全に破壊した」と書いている。

1863年2月、ローブリングはポトマック軍に配属され、フレデリックスバーグに戻った。そこで彼は、ある夜遅く、古い石造の刑務所に宿泊させられた。その場所から次の朝、彼がやっとの思いで脱出した話は、長い間その先何年も家族の語り草となった。どうやら、その場所には全く明かりもなく、ローブリングはたった一人きりで、自分の周りを手探りすると、好奇心を刺激するような古い箆筒を発見した。蓋を持ち上げて内部に手を伸ばしたところ、彼の手が石のように冷たい顔面に触れた。蓋は、ボタンと下に戻った。彼は、さらに調査するのをやめ、床の一部を片づけて、手足を伸ばして眠りについた。夜明けに彼は、自分が一晩中どのような死骸と一緒にいたかを確認しようと箆筒を開けたところ、死体ではなく、保管されていたジョージ・ワシントンの母親の石像を見つけた。

彼がG・K・ウォーレン將軍の参謀に転任となった時期は、そのすぐ後であった。続いてチャンセラーズビル²⁰に向かった。ここでは、北軍ジョセフ・フッカー將軍が、南軍ロバート・エドワード・リー將軍と、リー軍の2倍の兵力をもって対峙していた。そして、フッカー將軍の軍隊の指揮は、これまでの経験を全く無視したようなものであった。ある時点で、ローブリングは、彼自

¹⁸ 第二次ブルランの戦い (Second Battle of Bull Run) は、南北戦争の東部戦線の一部であり、1862年8月28日から8月30日の戦闘である。南軍の將軍ロバート・エドワード・リーの北バージニア軍によって、北軍のジョン・ポープ少将のバージニア軍に対抗して遂行された攻撃的作戦の頂点をなすものであり、1861年に同じ場所で戦われた第一次ブルランの戦いよりも、はるかに大きな規模と戦力で戦われた。

¹⁹ アンティータムの戦い (Battle of Antietam) は、南北戦争の中盤1862年9月17日、メリーランド方面作戦の一環としてメリーランド州シャープスバーグ近く、およびアンティータム・クリークで行われた戦闘であり、北部の大地で行われたことでは南北戦争で初めての主要会戦であった。両軍合わせて約23,000名の損失があり、合衆国の歴史の中でも単一日の戦闘として最も流血の多い戦闘となった。

²⁰ チャンセラーズビルの戦い (Battle of Chancellorsville) は、南北戦争の中盤の1863年4月30日から5月6日にかけて、バージニア州スポットシルバニア・コートハウスの村落近くで行われた戦闘である。北軍ジョセフ・フッカー少将のポトマック軍が、勢力では半分の南軍ロバート・E・リー將軍の北バージニア軍と会戦を行った。これは、リーが危険を承知で遙かに優勢な敵軍の前で自軍を分割して成功したので、「完璧な戦闘」と呼ばれている。戦闘におけるリーの大胆さとフッカーの臆病さが相俟って北軍にとって深刻な敗北となった。

身がフッカーと同じような立場、まさに砲弾によって2つに裂かれてしまうような状況に置かれていることに気づいた。その後数年間、彼は、自分があの時行ったような警告を大声で叫ばなかったとしたら、歴史がどのように変わっていたかを思い出したはずである。ファイティング・ジョーと呼ばれたフッカーにはそれ以上戦うことは無理であったはずであり、また、指揮官が別の人物であればフッカーの軍隊は戦いに勝ったのかもしれないと、ローブリングは判断していた。

チャンセラーズビルの戦いの後、数週間以内に、ワシントン・ローブリングは、敵の状況を探るために毎朝夜明けに偵察用の気球を揚げ始めた。そのような偵察飛行で、南軍のリー将軍がペンシルバニアとゲティスバーグ方面に再び移動を開始したことを、最初に発見したのは彼であった。

それは6月の初旬であった。6月24日、彼はウォーレン将軍から「ワシントンとボルチモア、必要に応じてフィラデルフィアまでただちに進行し、メリーランドおよびペンシルバニア南部境界地域の利用可能な最高の地図を見つける」命令を受けた。ウォーレンも、結婚式を挙げるために偶然ボルチモアへ行く途中であった。そのため、ローブリングは、そのような遠くまでウォーレンに同行することになり、2人は夜通し馬で走り続けた。その後、ローブリングは、フィラデルフィアとトレントンに向かった。そこにいる彼の父親が、ペンシルバニアの最高級で最新の地図を持っていることを、彼は知っていたからである。

ワシントンが暗くなってから突然現れたため、大きな邸宅の誰もが驚いた。特に、父親が大変驚いていた。彼は僅か一時間滞在しただけであった。6月29日の夕方、その地図を持ってボルチモアに戻ったが、ウォーレン将軍は軍隊に復帰するために既に出発した後だった。市全体が恐怖におびえた状態であった。次の朝、彼がフレデリックに向かって馬で西へ向うにつれて、あらゆる鐘が、警報を鳴らしていた。

彼は、戦いの2日目にゲティスバーグに到着するまで、ウォーレン将軍を見つけられなかった。その後、戦い²¹はすばやく進んでいった。

戦争中ずっと、ローブリングは、手紙で戦いの様子を伝えることは全くなく、彼自身の功績について伝えることもほとんどなかった。だが彼は、大事な時には現場にいるという大きな天賦の才能を持っていたようである。戦争が終わってずいぶん経ってから、ゲティスバーグにもいた友人の頼みで、その時の様子を次のように説明している。

ミード将軍の本部で、私はウォーレン将軍を見つけた。私とその状況に慣れ、周囲に目を配るようになった後、突然、ミード将軍が大声で話した。「ウォーレン、私は、あの小さな丘の向こうの方へ、砲弾を少し打ち込む作戦で進んでいると聞いている。馬

²¹ ゲティスバーグの戦い (Battle of Gettysburg, 1863/7/1~1863/7/3) は、南北戦争において事実上の決戦となった戦い。ゲティスバーグ戦役の中核を成し、アメリカ合衆国軍 (北軍) とアメリカ連合国 (南軍) が双方総力を結集、南北戦争史上最大の激戦 (戦死傷者数約3万5千人) となった。この戦いが転換点となり、合衆国軍が優勢になったと見るのが伝統的見解である。

で出かけて、危険な状況になっていないか偵察し、それに対処してくれないだろうか（これは、文字通りである）。

だから、我々は、馬に乗って出かけた。・・・でこぼこの小さい丸い丘の麓に到着して、ウォーレン将軍がウィード将軍と話すために立ち止まっている間、私は頂上へ駆け上がった。南軍のジョン・ベル・フッド将軍率いるテキサス軍の先頭が、ビッグ・ラウンド・トップとリトル・ラウンド・トップの境にある岩だらけの峡谷を登ってゆく様子が、一瞥しただけで分かった。私が駆け下りてウォーレン将軍に話すと、彼は私と一緒に駆け上がり、ただちに行動する必要があることを認識した。

・・・前方の若干離れた場所にいたサイクス将軍の許可を待たずに、ウォーレン将軍は、これらの部隊に、回れ右をして一列に並び、リトル・ラウンド・トップとその隣接地を防御するよう命令した。発砲が、直ちに開始された。そこ（リトル・ラウンド・トップ）に砲台の設置場所を確保することは、とても重要であると考えられた。

チャールズ・E・ハズリット中尉が指揮する砲兵隊がすぐ近くにおり、丘を登り始めたが、砲台を馬で引き上げることができず、兵隊の手で車輪をつかんで引き上げた。私が片方の後輪を強く引っ張り、もう一方の後輪を上官のウォーレン将軍が強く引っ張っていた。やっとのことで我々は頂上にたどり着き、数発の砲弾を発射した。敵は、丘が占領されているとは思っていなかったので、大きな精神的打撃を与えることになった。

リトル・ラウンド・トップの防衛は、多くの歴史家から、南北戦争の分岐点として見られることとなる。当然のことながら、ウォーレンは功績を独り占めすることとなり、ゲティスバーグの英雄の1人として記憶されている。だが後に、ウォーレン将軍の若い副官が一般に話しているように、将軍は「ローブリングは私のスタッフであり、私が知っている誰よりも有能で、勇気ある行動をとったと、私は思っている」と言っていたようである。ローブリング自身は、簡潔で控え目な特徴がある。「私は、リトル・ラウンド・トップの上に立った最初の男であった。その小さい丘に駆け上がったことに特別な功績はないが、殺されることなくその場所に留まったことには、何かがあったからであろう」

リトル・ラウンド・トップでのローブリングの初期の活躍は、人々が彼の戦争記録を説明するときに必ず話されることである。しかし、派手なダニエル・シクルズ将軍が自分の足を失ったときにも、ローブリングは将軍の近くにいた。ローブリングは、ピーターズバーグで南軍の前線の地下でトンネルを掘る工兵を手伝ったこともある。その大胆な計画はとてもうまく進んだが、結果的には壊滅的なクレーターの戦いとなってしまった。一度は、大きな爆発が起きる前、夜明け前のまだ月が出ている時に、ローブリングとウォーレン将軍が、南軍のリー将軍の陣営のすぐ傍を腹ばいで進んだこともあった。

後にワシントン・ローブリングは、エイブラハム・リンカーンに関して、次のような注目すべ

き描写も書き残している。

・・・私は4年間南北戦争に参加し、リンカーンに2度会う機会があった。最初は1861年5月、私を含む新しく入隊した兵士に対して、ホワイトハウス後部の柱廊玄関から、短い歓迎演説をした時である。2度目は、1864年4月1日頃、カルペパー郡にやってきて、ウィルダネスの戦いに向かう前の兵隊を視察した時である。その当時、私は陸軍少佐でウォーレン将軍の副官として、第5軍団²²を指揮して、騎馬行進に加わっていた。

大統領は、強情で気難しい馬に乗っており、明らかに熟練した乗馬者ではなかった。

行進が始まってすぐに、彼のシルクハットがパンタロン²³の横に落ちた。パンタロンは下側が固定されておらず、膝の部分をずり上がり、白い自家製のズボン下が見えていた。そのズボン下は、数本の白い平らな紐で下側が固定されていた。まもなく、その紐がほどけてズボン下も同じようにずり上がり、長い毛深い足を露わにした。

我々は苦笑したいと思う一方で、同時に、そのような不相応で屈辱的な苦悩に、我々の貧しい大統領が耐えなければならない状況を見ることは、とてもくやしかった。繕いが行われたあと、視察は続けられた。

戦争が長引いたので、両陣営の他の何千もの人々のように、ワシントン・ローブリングは戦争が終結する日がくるのかどうか疑問に思い、彼が言うように、だんだん元気がなくなった。彼はエミリーに「北部地域の工場群に新規の蒸気機関を設置する必要がある。殺戮目的のためのここでの需要は、供給をはるかに上回っている。しかしながら、最後の男が殺される時に、戦争が終わるであろうというこのような慰めに対して、神に感謝する」と打ち明けている。

本当の英雄は前線の兵士達であると、彼は発言していたが、その後、痛烈に「それら全ての兵士が、日々常に生命を危険にさらして、何をして耐え忍んでいるかを時々考えると、彼らがそれほど馬鹿者とは思えないし、彼らに対して他に何かをするように命令することもできない。そして、つまり、われわれが現在苦勞していること、すなわち馬鹿なやつら全員が殺され続け、残った者が立ち上がり、銃で射殺されるまで戦い抜こうと考えていることが、まさに問題である」と言い添えている。彼は、自分が死ぬのも時間の問題と信じていた。

戦いの無い時には、彼はトランプで賭けをやり、蚤をつぶし、葉巻を吸い、ウイスキーが手に入るときはどこでも飲み、暑さを呪って、1956年冬のニューヨークのトロイの学生時代に彼の寝室の窓の外にある温度計が華氏20度(-7℃)を下回った時のことを考えるようにしていた。彼は周りの人々と同様に、自分が一生懸命に戦っている相手に対して、ますます同情するようになっ

²² 第5軍団は、ポトマック軍(Army of the Potomac)の隷下に、1862年5月18日に創設された。この時期、ポトマック軍は半島方面作戦に参加しており、軍団もこれに加わった。また、有名な七日間の戦いにも参加した。1865年6月28日に解隊された。

²³ 19世紀のぴったりした男性用の長ズボンで、足首の部分から甲の下を通す紐が付いていた。

ていた。彼は再びエミリーに「・・・南軍の人々の戦い方は、例えばピーターズバーグの防衛でも示されたように、何度も、本当に立派に見えます。銀髪の老人が、ほんの13～14歳くらいの少年と塹壕で並んで亡くなっていました。彼らの家や地域を守ることに献身的な人々と戦わなければならないことは、とても残念なことです」と手紙を書いている。

1864年2月22日の夕方に開催された第二軍団の将校舞踏会で、エミリーは、ローブリングと交際するようになった。その舞踏会は、ローブリングが監督して、特別に建てた催し用の巨大な木造会館で開催された。彼は、妹のエルピラ宛に「大した期待はしていなかった。だが、少なくとも150人の淑女がその舞踏会を優雅にし、北軍の各部隊から、ミード将軍から私に至るまで、少なくとも300人の紳士が参加しました」と書いている。その催しは大成功であった。

舞踏会の費用は1500ドルであり、ワシントンの軍団から提供されました。ワシントンからはとても著名な女性達、ハムリン嬢やケイト・チェイス嬢、ヘール嬢姉妹に至るまで出席しました。最後になりましたが、ウォーレン将軍の妹のエミリー・ウォーレン嬢も出席しました。彼女は舞踏会に出席するために、わざわざウェスト・ポイントからやってきました。私が彼女に会ったのは初めてであり、貴方の兄ワシントンの心を彼女がとうとう占領してしまったという判断は、まさにそのとおりです。それは、実に有効な攻撃でした。私の内部でそのような事件が起こりそうな前触れもなく、突如やってきました。したがって、全てが好結果となりました。そして、私がそれに負けてしまったと話すことが、間違いなく私にとって最高の喜びです・・・。

その後2人は、ほぼ毎日のように互いに手紙を書き、2～3回ほどボルチモアのウォーレン将軍の妻の実家や、エミリーと若いウォーレン夫人が将軍を訪ねてキャンプに来た時に再会した。リンカーンが視察に訪れた頃に、ローブリングは、父親宛てに結婚の計画を伝える手紙を出し、返信でいろいろ言われることを覚悟していた。しかし、シンシナティからの返事は、彼が予想したものではなかった。ジョン・A・ローブリングが、長男の判断への全面的な信頼だけでなく、息子に対する愛情を示した珍しい事例の一つが、その手紙である。

親愛なるワシントンへ

君からの25通目の手紙が昨晚届きましたでの、急いで返信します。君の婚約の知らせには驚かなかった。なぜなら、エルバイラから、以前にそれらしい話を聞いていたからです。愛が動機となり、動機が君を動かすことは、当然のことだと思います。なぜなら愛のない結婚は、自殺も同然だからです。また、君の選んだ女性が、君の伴侶にふさわしいのは当たり前だと思います。これら2項目がはっきりしているのです、反乱と戦争の可能性以外に君達の邪魔をするものは何もありません。このような非常事態の全てが過ぎ去れば、前もって分かっているように、君と若い花嫁はトレントンの父親の家で歓迎されるでしょう。我々の自宅は、いつでも君と花嫁に対して開かれています。そして、部屋が足らなければ、新しい家を隣地に建てることもできるし、家を借りることもできます。

君の将来の生活に関しては、十分理解していると思うが、トレントンの事業は指導者不足で悩んでおり、また事業の増強や拡大については、手伝ってくれる人材無しでは考えられない。もちろん私は他人を雇いたくないので、それには君しかいない。君には、君自身の個人的な利益だけでなく、我々一族の利益を推進するためにも、事業に加わり協力してくれることを期待しています。

金が必要となったら、いつでも連絡してきなさい。

私が親愛の情をこめて宜しく言っており、そして何よりも私が彼女に会うことを楽しみにしていると言って、あらかじめ君の若い花嫁を安心させるように君に頼んで、私の結びとします。

あなたの親愛なる父より

その後、彼女は、自らトレントンに向かった。彼の父親はニューヨークで彼女に会い、一緒に列車に乗ってトレントンに向かった。「私はとても彼女が気に入った。彼女との結婚が幸福なものになることは間違いない」とジョン・ローブリングは息子に連絡した。そしてワシントンは、トレントンにいる彼女宛てに「おそらく貴方は、水路の結構大きな水音で、初日には眠ることができなかったでしょう……。あなたの感じたこと全てを、必ず私に話してください……。橋梁監督のティルトンや水門管理人のミッチェル、運河の向こうでアイルランド風居酒屋を営むライリー夫人について、どのように思いましたか」と手紙を書いている。

それ以来、彼の毎日は果てしなく続いているようだった。ほとんど何も起こらなかった。それでも、彼女に次のようなことまで説明しようとしたので、彼がこれまで経験した退屈さとは違っていた。

この頃は、私がこれまでに過ごしてきたなかで、指折りの平穩無事な日として、際立っているかもしれません。私は、だいたい2時間手紙を書き、2時間以上ブラブラ過ごし、1時間散歩します。それに飲食を加えれば、1日はそれで終わりです。夜の内容はまして馬鹿げており、そのほとんどを50回を超えるような身震いや寝返りに費やし、時折あなたの夢を見ています。私の心は、もはや10年前のように想像力に富んだ状態ではありません。あの当時の私の夢の多くは、いまだに鮮明に覚えています。今夜は長い時間をかけて1個のボタンを探しましたが、結局は見つかりませんでした。また、私のズボン下の下側の紐が外れたことも書き添えます。これが就寝前のもう一つの裁縫仕事になりそうです。

ワシントン・ローブリングは、母親のことを心配していた。母親は急激に悪くなっており、父親の手紙によれば病気は軽いものではなく、自らの身の安全以上に心配していた。彼は将来について考え、これまでに学んだ工学技術の全ての事を忘れてしまうことを心配し、一旦戦争が終わ

った時に、自分とエミリーがどこに落ち着くべきかを悩んでいた。彼は、父親の後を継がない可能性についても視野に入れていた。父親の太っ腹の提案にもかかわらず、トレントンに魅力を感じていなかった。彼は「町は恐ろしくらい活気がなく、私は1週間そこにいるだけで、いつも疲れてしまう」と彼女に話していた。彼が自宅のことを思い浮かべるときは、ほとんどいつも、サクソンバーグのことであった。「そこでの私の人生の最初の8年間は、その後の20年間より、今でも私の記憶にずっと残っている」と彼は書いている。だが、サクソンバーグに戻る選択肢はなかった。

彼は顎ひげを蓄え、彼女の気に入るように髪をとくようになり、2匹の迷子の犬、子猫の親子、1匹トカゲを飼い、ハエを避けるために毛布を顔まで引き上げ、下の方に足を突き出して寝るようになり、鉛筆スケッチをして仲間の将校の1人を元気づけるような態度を示した。そして、これらのことを、エミリー宛ての手紙の1通に書いている。別の手紙で彼は「私は、一晩中バイオリンを弾いて自分を慰めており、その時間は十分にあります。別の男性から弓を借りて、すべり止めの松脂は、病気の馬から無断で借用しています。それは私に合っていたので、指の先端が痛み始めるまで演奏を続けました」と彼女に告げている。

1864年11月、彼の母親が亡くなり、葬儀のために急いでトレントンへ戻った。ローブリングは「・・・私たち全員にとって最も偉大な存在が行ってしまいました」とエミリーに話している。そして、その年末に彼にとっての戦争は終わった。彼は、リッチモンドの戦い²⁴の直前の軍事行動における勇敢な行動により、12月6日に名誉昇進によって中佐に昇進した。彼は、クリスマスまで自宅に滞在した。1月にニューヨーク州コールド・スプリングで、彼とエミリーは結婚式を挙げた。

2人は最初トレントンに住み、ワシントン・ローブリングはワイヤー工場に戻った。だがそれは、ほんの数ヶ月続いただけであった。1865年春の初旬、戦争が終わる直前に、彼はオハイオ川橋梁での父親の仕事を手伝うためにシンシナティに向かった。そして、彼が生活する場所を見つけた後に彼女も移り住んだ。橋梁が完全に完成する時期まで、シンシナティで彼らはほぼ2年間を過ごした。なお、父親のジョン・ローブリングはその時期の大半をトレントンに戻っていた。

1867年初旬、イースト川橋梁がついに一部の本格的な支持を受けるようになったと思われた頃、父親ジョンは、ワシントンに宛てて、今年の夏にニューマチック・ケーソンを研究するためにヨーロッパに向かって欲しいという手紙を書いた。もちろんエミリーもいっしょに、また2人の費用は全て父が支払うことも書き添えてあった。ワシントン・ローブリングは「思いやりのある依頼・・・私は喜んで引き受けます。エミリーは特に喜んでいます。彼女にとってヨーロッパに行くという考えは、きわめて素晴らしいことのようにです」と返信している。

²⁴ リッチモンドの戦い (Battle of Richmond) は、南北戦争中盤の1862年8月29日から8月30日に、南軍のハートランド攻勢 (ケンタッキー方面作戦) の一部として、ケンタッキー州リッチモンド郊外で行われた戦闘である。この戦闘は、南北戦争の中で南軍による最も完璧な勝利と言われることがある。

2人は6月末に船出した。その時、エミリーは妊娠2~3ヶ月であった。数週間後にイングランドに到着し、その後フランスを經由して、ドイツに渡った。そこで赤ん坊が生まれた。ロンドンでは、セントポール大聖堂や国会議事堂、ウエストミンスター、動物園などを訪問した。宿泊したロイヤルホテルの窓から、彼はブラックフライアーズ橋(図-7.8²⁵)の建設状況を見て、スケッチをして父親に送った。



図-7.8 ブラックフライアーズ橋(1869年開通)
橋長281m, 5径間, 幅員21m(当初)

彼は、メナイ海峡を渡るトーマス・テルフォードの橋梁(メナイ吊橋)とクリフトンのブルネルの橋梁(クリフトン吊橋, 図-7.9²⁶)を大急ぎで見学した。なお、クリフトン吊橋は、長い間、世界中で最も美しい吊橋とされていた。だが彼は「テルフォードの吊橋の主塔はそれほど均整がとれていないと思う」とジョン・ローブリングに手紙を書いている。床組の重量はとても軽く、補剛トラスを有していなかった。「その橋の上を歩いた時、強い風が吹くと橋の振動がとても強く感じられた」と述べている。クリフトン吊橋の主塔については、ものすごく不恰好であると述べている。



図-7.9 クリフトン吊橋(1864年開通)
最大径間長214m, 幅員9.4m, 桁下空間75m

2人はマンチェスターを訪問し、彼は、リチャード・ジョンソン&ネフェュー社の著名な製鋼所の見学に数日を費やした。そこは、シンシナティ橋梁のケーブル素線を製造した工場であった。2人は、バーミンガム、シェフィールド、ニューカースルを訪問し、その後、万国博覧会²⁷を見るためにパリに向かった。しかし、彼らはお金が不足してきていたので、1週間後にパリを後にした。パリでは、1人の女性に対して男性2人分の費用がかかると、父親に説明した。博覧会は、これ

²⁵ https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Blackfriars_Bridge,_River_Thames,_London,_with_St_Pauls_Cathedral.jpg
(参照日 2016-02-12)

²⁶ <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Clifton.bridge.arp.750pix.jpg> (参照日 2016-02-12)

²⁷ 1867年のパリ万国博覧会は、1867年4月1日から11月3日までフランスのパリで開催された国際博覧会である。42ヶ国が参加し、会期中1500万人が来場した。パリで開催された国際博覧会では2回目となる。日本が初めて参加した国際博覧会であり、江戸幕府、薩摩藩、佐賀藩がそれぞれ出展した。

までで最も大きな国際的な博覧会と考えられており、アメリカの委員の中には、彼のトレントンの仲間ワイヤー事業の競争相手であるエイブラム・ヒューイトがいた。しかし、ローブリングは展示会については軽く考えており、「大きな広告ショー」以外の何物でもないと言っていた。

驚いたことにドイツのエッセンで、彼は、まるで貴族が訪問したように、クルップの工場を案内された。エッセンに初めて到着した際、彼は、部外者には工場を訪問できる可能性がほとんどないことを、数人の地元の人々から言われていた。彼は、その工場に勤めている数人の若い技術者とワインを飲んで長い夜を過ごした。それは、訪問の糸口となるような友人を得ようとしたものだが、彼がその話を出すたびに浮かぬ顔つきとなった。結局、失うものは何もないと判断し、彼は直接本社に出向いた。そして、成果は得られないと覚悟していたが、それどころか、会社は、ローブリングの到着を待ち望んでいたことが判明した。経営陣は、間近に迫ったイースト川橋梁のことを十分承知しており、彼のヨーロッパへの旅行についても全て知っており、彼の私的な視察に対して試供品のアイバーを既に製作済みであった。

彼は、3ヶ国全てで、橋梁技術者や製鋼会社と話し合い、製鋼所を訪問して、何万語にもものぼる記述や、何百もの小さなフリーハンドの図面や図表を、彼のノートや手紙に書き留めた。彼の観察力は並外れており、膨大な情報量を記憶することができた。それでも、そのために特別な努力をしている素振りは、全く見せなかった。彼は、建設現場の周辺や工場の中を、案内者の話を丁寧に聞きながら歩き回り、見学しているものに対して、とてもさりげなく注目していただけたように見えたであろう。その後ホテルの部屋に戻り、とても驚くような記憶力で、詳細事項や数多くの重要な分析のために、見学した事項の十分詳しい説明を書き留めたのであろう。

例えば彼がヨーロッパから帰国した後、ピッツバーグにしばらく滞在した間に、アンドリュー・カーネギーの新しいキーストン・ブリッジ社の工場見学に招待された。そして、その夜マナンガヒラ・ハウスで一人になると、彼は、キーストン社の稼働状況全般に関する徹底した報告書を、父親宛てに書いた。その報告書には、使用中の種々の機械とその稼働状況や製造方式に続いて、関係する職員や生産された色々な製品、それらの相対的な長所に関するローブリングの意見が記述されていた。その手紙は、彼の小さな筆致でさえ数ページに渡り、全て素直に書き留められている。そこには、表面上の躊躇も無く、削除箇所や編集もなく、明らかに特に苦勞した様子も見られなかった。手紙の最後に、カーネギーとその兄弟がとても感じのよい人々だと思ったと書いた後で「見学した全ての事を説明するために、20ページ程の別の手紙を書くことができます。それら全てのことを、今でも覚えています」と父親に告げている。

そのような息子の真の意図は、父親にはその意味が通じていた。そして、青年がヨーロッパに渡ってその方法で行ったように、1通目の手紙の後で、技術的な事項を別々にほぼ完全に記載した別の手紙を送っていた。ヨーロッパからの手紙は、ワイヤー製造の件や、冶金学の最新の開発状況、特にベッセマー鋼の製造や、ケーソンに関したものであった。なお、ケーソン (caissons) という綴りを、どういうわけか「cassoons」と綴っていた。そして、全ての事項がトレントンで十分に役にたつように、ある程度明確で徹底的に説明されていた。1868年3月、2人が赤ん坊を連

れて大西洋を渡って戻る頃、彼はニューマチック・ケーソンに関して、あらゆるアメリカの技術者よりも精通するようになっていた。

彼と父親は、ブルックリンの橋梁の成功がケーソンに依存していることを、認識していた。全てのことが、それらの成功に掛かっていた。ケーソンを、的確に河底の必要な深さに沈めることができれば、引き続いて橋梁を建設できるようになることは間違いないと思われていた。なお、そのケーソンは、これまでに建設されたどのようなケーソンより、はるかに大きなものであった。もしそれができなければ、橋梁の建設、少なくともジョン・ローブリングが1867年の秋にとても説得力のある言葉で説明した橋梁の建設は、不可能となったであろう。たまたま1867年の秋、息子ワシントンは、まだヨーロッパにおり、ケーソンを建設するための最良の方法を確定しようとしていた。

自宅に戻った後、ローブリングはトレントンの工場で忙しく働きながら、ニューヨークの政治家がその事業を決着するのを待っていた。1868年、彼の父親はケーソンの基本計画を完了し、一方、彼は、父親の要請により別件での長期間の視察を行った。その視察は、当時の東部ペンシルバニアの無煙炭地域の採掘作業で、どのようにワイヤロープを利用できるかを調査するものであった。彼とエミリーは、一時的に大きな自宅に同居していた。父親は再婚した。弟のフェルディナンドも、この頃には結婚していた。妹のローラは、子供たちを連れてスタテン島からやって来ていた。秋になると、赤ん坊が歩き出していた。

橋梁事業が動き出すという知らせがブルックリンから届き、彼とエミリーは、荷作りをして、ブルックリンのヒックス通りの住宅へ引っ越した。

父親ジョン・ローブリングが亡くなった直後の数ヶ月間、ワシントン・ローブリングは、ブルックリンから離れている時間が多かった。彼は、幾度となくトレントンへ戻った。そこには、面倒をみるべきワイヤー事業と同様に、清算すべき父親の財産があった。大きな自宅で、長い期間をかけて親族会議が開催された。やっとな次男のフェルディナンドが事業を引き継ぎ、三男のチャールズがトロイの学校を卒業と同時にそこを手伝うことが決まった。しかし差し当たり、ワシントンは、重大な決断を下したようである。誰もその問題を予想しえなかったことだが、その後すぐに、長男のワシントンがブルックリンで結構たいへんなトラブルに見舞われた時、チャールズ・スワンの処遇を巡って、全面的な一族での争いとなった。父親の遺言では、スワンを共同経営者とするよう依頼していたが、フェルディナンドは、それを望まなかった。ワシントンは、彼が必要であると言った。スワンは仕事をやめて、何もいわず、明らかに激怒してどこかに行ってしまった。しかし、最終的にその関係は修復して、スワンは共同経営者ではなく、十分な金銭面での待遇で処して、職場に復帰した。

意見の一部の相違があったものの、ワシントンが四男エディーの後見人となることについても

同意された。ワシントン・ローブリングは、父親の橋梁建設を進め、彼の幼い家族の面倒を見ることなど対処すべきことが、たくさんあり過ぎると感じていた。父親が、問題を抱える幼い弟にとって、父親らしいことは何もしない人であったとも感じていた。だが、他の親族は、そのようには思っていなかったようである。それでエディーはブルックリンへ引っ越し、エミリーは彼のために部屋を用意していた。

ローブリングには、まだ処理すべき多くの視察が残っていた。ニューヨーク州ポート・チェスターで、彼はホレイショ・アレンと、一日かけて浚渫装置を視察した。ローブリングはオールバニーにも出向き、新しい州議事堂の基礎に設置される黒い石灰岩と花崗岩を視察した。その州議事堂は、ウィリアム・ジャービス・マッカルピンによって建設されていた。ローブリングは、石灰岩採石場を訪問するためにカナダのオンタリオ州キングストンにも立ち寄り、そこの人々の話を聞いた。彼は、小さな黒革のノート何ページにもわたって、名前や住所や注意項目を「彼らが採石した石をどこで買い付けているか郵便局で調査する。・・・カルシウム灯具に関してあらゆることを調査する。誰が鍛造製の吊上げ装置を造っているか調査する」等と書き込んでいた。彼は、コネチカット州ニアンティックに出向き花崗岩を視察し、メイン州ハルウェルに出向きジョセフ・R・ボドウェルの採石場を調査した。悪名高いトゥームズ州刑務所は、ボドウェルの石材で建てられていた。同じく、セントラル・パークの新しい巨大な貯水池の笠石もその石材で作られており、その数箇所は、ウィリアム・C・キングズレーが建造したものであった。花崗岩の品質は「とてもすばらしく、たいへん耐久性があり、・・・最も白い花崗岩として知られている」とローブリングはノートに書いている。

しかしながら、彼の最も重大な関心事は、初めての巨大なケーソンであった。8月中旬、コリングウッドが作業状況を報告した直後、ローブリングは、概略の図面と要求事項に関する長文の説明書を彼に手渡した。そして、コリングウッドとペイン、ヒルデンプラントは、最後のインチまで図示する最終計画の仕事に着手した。そのようなケーソンを製造できる所は、はっきりしており、造船会社しかなかった。1869年10月25日、ウェッブ&ベル社との契約が成立した。その造船所は、イースト川の上流のグリーンポイントにあった。そして、橋梁の建設の始まりを示す日付を選ぶとすれば、おそらくその日とすべきであろう。

ケーソンは大仕事となる基礎工で、まさしく文字通り象徴的なものであるということを、ブルックリンでローブリングと一緒に働いている誰もが認識していた。長い年月を経て、ほとんどの人が見落としている事実で、評価をする専門家の中にも見落としている人がいる事実がある。それは、ケーソンの専門家に一番近く、橋梁の基礎部分をどのように処理すべきかに専心していたのは、父親以上にワシントン・ローブリングであったという事実である。そして、彼がそれまでに実際にケーソンの仕事の経験が全くなく、その経験があるのは2,3人のアメリカ人技術者だけで、その一人がマッカルピンであるというとても明白な状況において、彼が基礎の施工に専心していた事実が、おそらくいくらか埋め合わせる助けとなったのであろう。セントルイスではミシシッピ川を渡る橋梁で、ジェームズ・B・イーズ船長が、初めてのケーソンをまさに完成させていた。それでも、「ケーソン」という用語でさえ、少数の技術者以外の人々には、なじみの薄いもの

であった。

ジョン・A・ローブリングは、絶対的で文句なしの確信をもって、彼の橋梁が最も偉大な存在感を示し、その時代の最も偉大な土木事業になると宣言した。その時点で、息子ワシントン・ローブリングが実施すべきことは、それを建設することであった。